公衆浴場
「銭湯」の追憶

koberyo1

昭和の初期、私が子供の頃は町内に一軒ずつ銭湯があった。

銭湯は今より数が多く、今日はどこの銭湯に行こうか、と考える時などは、番台の愛想のよい「おばちゃん」の顔などを思い出して、その日浸かりに行く銭湯を選んだものだ。

今は家庭に内風呂が必ずあるから、銭湯をはじめ、温泉などの公衆浴場の入り方のマナーを知らない人が多いのでは、と思ったりする。注意すべきことはあ、やはり公衆が湯に浴する場所であるから、不衛生なことはやめた方がいい、ということは今も昔も変わりはない。ただ、昔はとんでもないことがあり、私が子供の頃は風呂場で洗濯する人がいたりした。

昭和のはじめ。銭湯に行く楽しみはといえば、いろんな人との裸の出会いがあるということだった。銭湯で知った者同士がお互いの背中の流し合いをして、世間話に花を咲かせる。また浪曲をうなっている年寄りがいたが、湯船につかりながら朗々とした解放感を味わっているのだと思うと、いとわしいなどとは思わず、ほほえましい気分になったものだ。子どもたちは、そのような庶民の日常感覚というか、市井の大人の背中を見て、社交性のなんたるかを自然と身につけていったものだ。

また銭湯の大きな湯船は、一度温かくなると、冬でもなかなかぬくもりがさめない。家庭の風呂だとそういうわけにもいかないだろう。銭湯が時代の流れで廃業したのには、さまざまな理由があるだろうが、まず燃料の入手の困難、すなわち湯を熱するために燃やす廃材が、なかなか手に入り辛くなった、ということもあるだろう。

各家庭に、一戸建て住宅でもマンションでも内風呂をつけることが常態化し、ガス会社はガスを売る配管の敷設や内風呂を売る営業力が背景にあって、私たちの豊かなこんにちの生活があるわけだ。

が、しかし貧しかったあの時代、銭湯は少ない入浴料で堪能できた、庶民のなくてはならない「いやしの場」であったことを忘れるべきではないと思う。